

## 平成23年度 第一学期 始業式あいさつ

3月11日に起きた大震災から4週間目に入りました。亡くなられた方々に心からの哀悼の意をあらわすとともに、被災された皆さんにお見舞いを申しあげたいと思います。

まだまだ厳しい状況が続いていますが、日本全国、世界中に支援の輪が広がり、被災地では復興への歩みが始まっています。日本中が今ひとつになろうとしていることを強く実感しています。

振り返ってみると、昨年末のクリスマスから平成23年の正月にかけては、タイガーマスクの伊達直人からランドセルの贈り物が届いたという話題が全国各地から寄せられました。そのとき、日本人ってやっぱり捨てたものじゃない、そういう思った人は少なくなかったと思います。

そして今回の大震災のあとの日本人の対応には、世界中から賞賛の声が今も鳴り響いています。捨てたものじゃないどころか、日本はすごいという思いがさらに強くなってきます。

イギリスのBBCニュースの「独立の精神」という高い評価については、修了式でもお話ししました。政府に怒りをぶつけて何とかしろと迫るのではなく、自分たちの頭で考え、それぞれの避難所で、地域で解決策を立てて頑張っている。誰かに依存するのではなく、その場、その時に、全体にとってもっとも適したやり方を自分たちの頭で考えて実行する。その伝統が、日本の農村にはずっと生き続けているんです。

加えて注目されるのは、「コミュニティ」の力です。さすがの日本でもコミュニティはもはや姿を消してしまったのではないか。何とかしたいけど、もはや復活は無理かもしれないと諦めも正直ありましたが、コミュニティは、東北にも関東にも生きていました。人々の心にちゃんと生きていました。

壊滅的な打撃を受けた陸前高田で、「気仙町けんか七夕」という勇壮な和太鼓のグループを率いて、全日本和太鼓フェスティバルを地元で開催してきた方がいます。彼は、日本太鼓連盟の会合があって東京に来ていて、帰る途中の新幹線の中で地震に遭遇し、ご本人は難を逃れましたが、創業200年を超えるご自身のお店は完全になくなってしまったのです。その彼が、地元へ帰って初めにやったのは、従業員にお給料を渡すことだったそうです。ちなみに、太鼓の仲間同士で培った絆は強く、この太鼓グループのあるメンバーは、自分たちが大変すぎる状況であるにもかかわらず、原発で苦しむ福島県の大塚町に住む太鼓仲間を気遣って連絡を取り合っているとのことでした。

人が最後に頼れるのは、当たり前ですがお金ではありません。人と人との絆、自分のことと同じように、いや自分以上に周りの人のことを思いやる「利他の志」です。そしてそれらが創り支えるコミュニティの力です。

武蔵丘高校は、コミュニティと呼ぶに相応しい高校を創りたいと念じ取り組んできました。そう考えることができたのは、この武蔵丘には、「友との絆」と「利他の志」の芽が伝統としてしっかりと受け継がれていたからです。

その芽を伸ばすために、力を入れたのは体育祭や文化祭、部活動ばかりではありません。勉強面においても常に集団を意識した取組が行われてきたのは、皆さんが知ってのとおりです。

生徒全員を対象にした自学自習ガイダンスや定着週間を実施したり、長期休業中や試験前の休みの日に補習や勉強会を行ったのも、英語検定や英語暗誦大会など互いに競わなければならない場なのに一緒に学ぶ機会を大切にしてきたのも、学校の中に「コミュニティ」と呼べる強い絆、互いを思いやる心を高めていきたい、そして叶うなら、その絆が一生涯続いて欲しい、学校内の友達だけでなく、広く社会に利他の志をもって羽ばたいて欲しいと願ってきたからです。

この武蔵丘に、「友との絆」「利他の志」を育みながらコミュニティを創り上げる取組の到達点は、私は70点だと思っています。十分な合格点です。しかし、まだまだ伸びしろがある。その伸びしろを確実に伸ばすのが平成23年度の大きな目標です。

コミュニティというのは、一つのシステムです。人と人がたくさん集まっても、「隣は何をする人ぞ」とばかりに、互いの人間関係がないか、あってもとても薄くては、システムにはなりません。システム科学によれば、システムとは、お互いに相互作用を及ぼしあう要素の集合体、集まりのことです。しかも、その全体の力は、要素のすべてを単純に足したよりも大きい、それが、「システム」なのです。

相互の関係と言っても、こういうのは困ります。例えば他人の足を引っ張る人です。人と人が信頼関係を築こうとしている時、人と人が協力して難しい課題に挑戦している時、そうした時に、あらぬ噂を流して、信頼という大事な相互関係を壊すような相互関係とでも言ったらいいいでしょうか。原発対応でも風評被害に注意しようというのは、コミュニティの正常な機能が崩されるからです。

人と人との間にある相互関係というのは、相手にとっても全体にとってもプラスをより大きくするように働く、こういう相互関係で成り立つのがシステムの本来の姿です。そして、何がシステム全体のためか、相手のためかを判断する力として注目できるのが「離見の見」です。

これは、日本の能楽の世界を大成した世阿弥という人が、「花鏡」という本の中に書き記した言葉です。「離見の見」の「離」とは離れる、「見」は「見る」という字を書きます。つまり「自分を離れたところから自分を見る」ということになるのでしょうか。能を舞い演じる時、自分の側から見ていたのでは、これを「我が見る」と書いて「我見」と言うそうですが、「我見」では自分の姿を客観的に見ることはできません。それに対して、客席にいる観客の立場に立って、自分の舞や演技、立ち居振る舞い、心の動き、己の人格までを見通していく。この力が「離見の見」です。

それがもてれば、自分の欠点を見つけることができる。直すこともたやすくなります。加えて、自分の利害、自分へのこだわり、自分の独りよがりを乗り越えて、システム全体にとって、世のため人のため、何が悪か、何が正義かも判断がつくようにもなります。

ですから「離見の見」を磨くということは、一人ひとりの力を高め、人と人とを相互関係としての「友との絆」「利他の志」を磨き、より豊かなコミュニティを育てることに通じるわけです。

世阿弥が活躍したのは室町時代で今から600年も昔のことです。日本には、そのころからコミュニティを大事にした素晴らしい歴史と伝統があるのです。しかし、私たちは一時期、このコミュニティをととても粗末に扱ってきました。そのコミュニティの復興を身近なこの武蔵丘高校で果たすことこそ、どんな状況の下でも君たちが末永く幸せに生きていく道であり、未曾有の危機に直面した日本を救う道であると確信しています。

君たちの今年度のいっそうの奮闘に期待します。

以上